

139 東京法学院秋季大運動会

〔法学新報〕第一一五号 明治三十三年十月二十日

○東京法学院秋季大運動会

月の二十八日をトせられて東京法学院秋季大運動会は例によりて城北、飛鳥山に於て開かれたり飛鳥山の地たる桜花の勝地と共に眺臨の景に乏しからず遠くは筑波を控き近くは隅田の監光（監）を裹み千住、田端、戸田、岩槻の郊外手に取る如く王子村落は眼下にありて画くが如く氣象豁然、真に運動の場に適せり此日朝来曇り勝にて午前八時一発の銃声空を破りて開会を報じたる刻下（こ）には漸く会衆三百に充たざりしが同九、拾時に至り天気定まると同時に聽て千有余名と註せられ、左の運動は音楽の節簇と共に午前中に進行したり

二百ヤード、載囊スポン、提灯競走、四百ヤード、宝拾、

障害物、兎飛、撰出二百ヤード、サツク競走等

数番の競走輸贏寸余、人をして片唾を吞ましめざるなく其提灯競走の奇なる宝拾競走の滑脱たる兎飛の洒然たる抱腹絶倒、拍手嘆称の声は洋々たる楽に和して秋高の大虚を破る、午余左の運動は試みられたり

撰手四百ヤード、問題競走等

余興には綱引、角力、職員競走等ありて当日の会幹奥田委員長、羽生司令長、花井審判長等も興に乗じて競走を試みらるゝなど

千余の神情愈々暢び、興味益々豪ならんとして暮靄筑波の峰を
罩む是に於て会幹奥田氏、賞品を交附し終りて会衆一同にて天
皇陛下万歳と、東京法学院の万歳を三唱し劉曉たる音楽の裡酒
榼を芝生に開き各自歡を尽して散会せしは五時四十分なりき